

『「アート／クラフト」研究会』

○私たちについて

先端研に所属する多様なバックグラウンドと研究関心をもったメンバーによる共同研究の会。2021年度から活動を続けています。「アート」と「クラフト」の中間的な実践を対象に、調査や研究発表を行っています。

〈現所属メンバー〉

- 柴田惇朗（公共4）：芸術社会学。多様な社会的条件のもとで小劇場演劇人がどのように活動を維持しているかを研究しています。
- 藤本流位（表象4）：2000年代以降の現代アート、特に国際芸術祭におけるアーティストの実践を事例に、出来事や状況の運営者としてのアーティストがつくり出す暴力の表象を研究しています。
- 坂本唯（公共3）：災害を経たあとに「日常に戻る」とはどういうことなのかについて、原発避難者へのライフヒストリーの聞き取りをもとに考えています。
- 西本春菜（公共1）：ハンセン病療養所をフィールドに、体験を語る本人がいずれ不在となる地域の記憶がどのように継承されうるかに関心を持っています。

○昨年度の活動

- 7・8月 研究会メンバーそれぞれに関心のある表現についてディスカッション
- 9月-11月 論文執筆へ向けて一つのテーマに絞りこんでいく
- 2月19日 〈調査〉東京都渋谷公園通りギャラリー《Museum of Mom's Art ニッポン国おかんアート村》の視察+共同キュレーター都築響一氏へのインタビュー
- 4月17日 〈学会発表〉柴田惇朗・藤本流位・坂本唯・竹田優哉、「研究対象としての「おかんアート」——美学、社会学、人類学からの検討」『第38回民族芸術学会大会』

○今年度の活動予定

- 9月-11月 調査を神戸市長田区で行う予定。ここはおかんアート研究の先駆者である「下町レトロに首ったけの会」が拠点を置く地域で、多くのおかんアート実践が観察できる。
- 年度内 論文投稿を目指す。

○「おかんアート」とは？

2000年代初頭にインターネットで自然発生した概念で、当研究会の当面のメインテーマ。主に「高齢女性による手芸作品」を指すが、一義的な定義は難しい。「どこにでもある」ことが特徴で、生活に浸透しているがゆえに「作品」として認識されづらい。また作者のカテゴリーを限定し、作品のあり方を矮小化するとの批判もある。

図1：折り紙手芸人形
(出展：東京都渋谷公園通り
ギャラリーウェブサイト)

